

(1) オーケストラの聴衆とオペラの聴衆

オーケストラの聴衆とオペラの聴衆*

倉 林 義 正

* 後にも述べるように、本研究は、放送文化基金の助成による「公共放送における放送交響楽団の経済的基盤とその助成のあり方に関する国際比較研究」の一部を形成する。助成を与えられた「放送文化基金」に対し感謝の意を表する。

この調査と研究の促進に当って貴重な資料を提供された財団法人舞台芸術センター常務理事町田裕氏、後述するAUDIUMファイル編成のためのアンケート調査のため格別の配慮を頂いた二期会オペラ振興会常務理事河内正三氏、アンケート調査の実施について協力を頂いた二期会事務局の方々、研究会の席上多くの助言を頂いた筑波大学助教授松原望氏、西ドイツにおけるオペラの実態について多年の蘊蓄を披瀝して下さった吉井澄雄氏に対して、特記して心からの謝意を表する。

一 はじめに

小論は、この一橋論叢の七十九巻一号（一九七八年一月）および八十二巻三号（一九七九年九月）に公けにした二編の論考、ならびにSEAPA Discussion Paper Series No. 2 (July, 1979) として発表した英文論文の後を承けて、SEAPA研究プロジェクトにおいて行った研究の成果であって、わが国におけるオーケストラのコンサートとオペラ公演の聴衆の比較を、社会・経済的特性に即して、数量的なデータに基づいて分析することを目的とする⁽¹⁾。小論は、本号に併載されている松田芳郎氏の論考と対^ひをなしている⁽²⁾。小論が、オーケストラとオ

ベラの聴衆の社会・経済的特性の大局的な比較を目指すのに対して、松田氏の考察は、共通のデータ・ベースを利用しながら、個々の聴衆の対比と照合を目指している。小論の目指すところが、主題に関するデータのマクロ的解析にあるとするならば、松田氏の分析は、データのミクロ的な解析に向けられている。事実、松田氏の分析が拠って立つデータ解析の方法は、最近社会・経済統計の分野で次第に注目されるようになっていゝ micro data matching (略して、MDM) の手法の応用にはかならないが、MDMと数理分類理論 (mathematical taxonomy) の展開は、今後マイクロ・データ・ベースの開発にとつてもすこぶる注目に値する分析手法と言わねばならないであろう。(3) 小論との対比において、興味ある読者が、松田氏の論考を参観されることは、主題に対する関心のみならず、広く社会・経済統計の最近の展開を知る上においても有意義であらうと思われる。

(1) 本研究は、放送文化基金の助成のもとに、統計研究会の中に組織されてゐるSEAPA (Socio-Economic Analysis of Performing Arts) の略記) 研究委員会において進めている研究成果の一部を形成する。同研究委員会の成

果としては、これまでに以下の諸論考がすでに公表されている。

倉林義正・松田芳郎「演奏芸術の需要と供給——一つの事例研究——」『一橋論叢』七十九卷一号(一九七八)。

倉林義正・松田芳郎「サーベイスとしての演奏芸術とオーケストラの聴衆」『一橋論叢』八十二卷三号(一九七九)。

Y. Kurabayashi, "Public and Private Expenditure on Cultural Purposes: A case of performing arts in Japan", *SEAPA Discussion Paper Series No. 2*, Institute of Statistical Research, Tokyo, July 1979.

倉林義正・松田芳郎「クラシック音楽演奏会における聴衆の実像」『音楽芸術』三十八卷十二号(一九八〇)。

(2) 松田芳郎・有田富美子「演奏芸術の聴衆の構造——東京地区演奏会の事例分析——」『一橋論叢』八十五卷、二号(一九八〇)。

(3) マイクロ・データ・ベースをめぐる最近の展開に関するサーベイと各国における研究の主要な文献リストは、United Nations, "Methods of Collecting, Organizing and Retrieving Social Statistics to Achieve Integration", E/CN.3/516, 5 June 1978,

に与えられている。またSSDSの発展から見たマイクロ・データ・ベースの意義と発展は、

倉林義正・作間逸雄『国民経済計算』東洋経済新報社、一九八〇。

(3) オーケストラの聴衆とオペラの聴衆

においても言及されている。また、数理分類理論の概略に
関しては、

松原望『意思決定の基礎』朝倉書店、一九七七、
Otto Optiz, *Numerische Taxonomie*, Gustav Fischer
Verlag, Stuttgart, 1980.
を参照。

二 演奏芸術の生産——オペラの場合

小論の主たる目的は、サービスとしての演奏芸術の消費者である聴衆の社会・経済的特性を、二つの演奏芸術の形態であるオーケストラとオペラを対比させることによって、説明することにある。この意味で、小論の考察の主たる対象は演奏芸術の需要面に向けられている。しかし、それに先立ってオペラの場合を例にとって、演奏芸術の供給の一つの側面を考察しておくことにしよう。この考察は、われわれがすでに本誌の七十九巻一号に掲載した研究において行っているオーケストラの場合の生産の構造の分析と対を形成する。

ところで、その検討を行うに当って、わが国には多くの欧米諸国の場合とは異って、常設のオペラ・ハウスを持っていないことに注意せねばならない。したがって、

わが国のオペラ団体の活動も断続的な公演に限定されており、ウィーン、ラ・スカラ、メトロポリタン、コペンハーゲンなど主要な歌劇場の例に見られるようにシーズン中の継続的な公演と言う方式は採用されていない。以上の点を考慮して、ここでは西ドイツのオペラの場合を例にとって検討を進めることにしたい。よく知られているように、西ドイツは市場経済体制の主要工業国の中では、最もオペラが盛行している国である。したがって、以下の考察は、オペラ最先進国の一つを例とする事例の検討であると思なすことができる。

西ドイツには、大小合わせて五〇に余る常設のオペラ劇場が存在しているが、ここではそれらの代表として、ベルリン・ドイツ・オペラ、バイエルン州立オペラ、ハンブルク州立オペラ、ケルン市立オペラ、ドルトムント市立オペラ、ハノーファー州立オペラの六つのオペラ劇場の数値例を検討することにしよう。⁴⁾ 簡単のため、これらのオペラ劇場を順次 DOB、BSO、HUSO、KSO、DSO、HASO と略記することにする。通説によると、この中の DOB、BSO と HUSO は、西ドイツを代表する別格の大劇場であり、前の二つ (DOB と B

第1表 オペラ劇場の客席数と1公演あたり経費
(1972~73年度) (単位: 1,000 DM)

	客席数	人件費	物件費	費用計
DOB	1,903	99.468(80.5)	24.121(19.5)	123.583
BSO	2,101	100.684(78.7)	27.267(21.3)	127.951
HUSO	3,649	93.216(80.3)	22.940(19.7)	116.155
KSO	1,346	109.599(77.9)	31.042(22.1)	140.641
DSO	1,160	71.870(81.6)	16.209(18.4)	88.073
HASO	1,503	70.772(78.3)	19.564(21.7)	90.336

(注) カッコ内の数字は費用計に対する構成比の%表示

オペラ劇場を代表するものと考えて大過ないものと思われる。以下の数値例の分析において注意をしておくべき点は、これらのオペラ劇場ではオペラ公演と併行して、バレエの公演をも定期的に行っており、中・小の歌劇場の中には演劇の公演をも併せて行っている事例もないわ

S O) は、わが国への引越公演によってわれわれにも極めてなじみ深い存在である。つぎの二つ、すなわちK S OとD S Oは、大歌劇場のクラスに、また最後のH A S Oは、中規模の歌劇場のクラスに格付けされているから、われわれが用いている事例は、西ドイツを全体として見た場合のAクラスの

けではない。しかし、われわれが例示するAクラスの歌劇場の場合には、(S N Aの意味における) 副次的生産物に該当する演劇の結合生産は、ほぼ無視しうるし、副産物と見なされるバレエの公演は、主要生産物であるオペラの生産の中に入れて考えて行くことが許されるであろう。以下の数値例も副産物としてのバレエ公演を含めたオペラの生産に関するものである。

第1表は、これら代表的オペラ劇場の一公演あたりの経費とその内訳、および客席数とを示したものである。客席数は、オペラの生産の capacity output の一つの物的な測度ともなりうるものである。ここでは、まずこの費用構成に注目しよう。人件費と物件費の構成比については、六つのオペラ劇場の間に大きなバラツキはない。人件費の構成比について言えば、その範囲は、八二~七八%の幅に収まっているからである。この中間値の八〇%は、われわれが本誌の七十九巻一号において推計した日本のオーケストラの場合における人件費比率の平均のほぼ上限に相当すると考えることができる。オーケストラの場合と同様に、オペラの生産においても人件費の占めるウェイトは圧倒的である。この事実、オペラの生産

(5) オーケストラの聴衆とオペラの聴衆

においてもまた(オーケストラの場合と同じく)、一面において「規模の経済性」の利益を享受する可能性を全く閉ざしてしまうこと、他面において人件費の上昇の圧迫のもとでは、オペラの経営は、不断の「income gap」発生(の危険——いわゆる「ボウモル氏病」(Baumol's Disease))——にさらされていることを物語るものと言(6)ってよいであろう。

前にも言及したように、これら六個の数値例は、ほぼ西ドイツのAクラスのオペラ劇場を代表するものと考え(7)てよい。そこで、費用別の各オペラ劇場のウェイトを用いて、一公演あたりの加重平均を作ると、

人件費	物件費	費用計(1,000 DM)
92.614(79.6)	23.695(20.4)	116.309

のようになる。すなわち、このようにして推定された西ドイツのAクラスの平均的オペラ劇場の一公演あたりの所要経費は、約十一万六千マルクであって、その約八〇%が人件費に費されていると言う結果となっている。

この推計と数値例は、一九七二—三年度のシーズンに関するものである。そこで、一九七三年現在のわが国にこの平均的オペラ劇場を移し替えたとして、一公演あ

たり経費の円表示は、どの程度の額になるのだろうか。明らかに、為替レートをDMから円への換算に用いるのはミスリーディングである。為替レートがオペラの生産の購買力比価(PPP)を正確に反映するものではないからである。そこで二つのPPPを想定して円換算を試みてみよう。ケースIは、国連が世界銀行およびベンシルバニア大学との協同作業として進めているGDPとその構成要素の購買力に関する「国際比較プロジェクト」(United Nations International Comparison Project)が推計した公共娯楽のPPPのフェースIIにおける値——マルク二六一・四円——によって換算された値である。(7)しかし、このPPPの値は、筆者が別の機会に指摘した理由によって、過大に評価されていると考えられる。(8)そこで、ケースIIでは、やや大ざっぱであるが一マルク一三〇円の比価を用いて計算を試みてみた。この比価は、吉井澄雄氏が同じく西ドイツのオペラの計数を円換算するのに用いた比価であって、いわば専門家の一つの達観による計数とみなすことができよう。(9)換算の結果は、次に示す通りである。

	人件費	物件費	費用計(1,000円)
CASE I	24,209.3	6,193.9	30,403.2
CASE II	12,039.8	3,080.4	15,120.2

いま、この仮設的オペラ劇場が年間に二五〇回の公演を持つものとして。ふつう西ドイツ、オーストリーのオペラのシーズンは、九月の上旬から六月下旬までとされているからこの公演数の想定は、シーズン中はほぼ週一回の休演を見込んだ控え目の想定と言ってよいであろう。

このとき、年間の所要経費は、ケースⅠについては、まるめの結果七五・〇億円であり、これをケースⅡについて計算すれば、三七・八億円となる。ここで、この仮設的オペラ劇場が国家の手によって経営されているものとして。いわゆる国立オペラ・ハウスの最も純粋な形態を想定するわけである。いわゆる「新NSA」方式による国民経済計算統計によると、政府の最終消費支出の目的別分類においては、国立オペラ劇場のような文化サービスの供給のための経費は、「その他の地域社会および社会サービス」に含まれる。一九七二―七三年度の数値は、一九七九年報において、一一三三・〇億円と報告されているから、その中でこの仮設的国立オペラ劇場の

年間の運営に必要な経常的経費の占めるウェイトは、ケースⅠを想定すれば、六・六二%、ケースⅡを想定すると三・三三%と言うことになる。⁽¹⁰⁾

以上極めて大ざっぱな推計であるにしても、たった一つの国立オペラ劇場の経常的な運営に対してすら、中央と地方を含めた政府の最終消費の中で「その他の地域社会および社会サービス」に割りうる経費の三ないし七%を費さねばならないと言う事実は、国立オペラ劇場の運営が、一般に人びとの考えるほど安直なものではないことを示唆しているものと言いうるであろう。

(4) 以下の数値例とその推計の基礎となるデータの利用に関しては、財団法人舞台芸術センター常務理事町田裕氏の配慮を煩わした。記して感謝の意を表したい。

(5) SNAにおける第二次生産物の副産物と副次的生産物の相違と定義に関しては、倉林義正・作間逸雄『国民経済計算』、東洋経済新報社、一九八〇、を参照。

(6) M. Blaug, "Introduction: What is the Economics of the Arts About?", in Mark Blaug, ed., *The Economics of Arts*, Martin Robertson, London, 1976.

(7) Irving B. Kravis, Alan Heston, Robert Sommes, *International Comparisons of Real Product and Purchasing Power*, Johns Hopkins University Press, Bal-

(7) オーケストラの聴衆とオペラの聴衆

timore and London, 1978.

(8) Y. Kurabayashi, "Measurement of Output in Public Supported Services for the International Comparisons: A case of cultural activities", November 1980, a paper presented to the expert group meeting on "The treatment of services provided or priced by government in international real output comparisons", held at Bellagio, Italy, 6 to 11 December 1980.

(9) 吉井澄雄「西ドイツの国家型援助」『音楽芸術』一九八〇年十一月号。

(10) 政府の目的分類の詳細については、倉林義正・作間逸雄『国民経済計算』、東洋経済新報社、一九八〇年、参照。

SNAにおける政府の目的分類の中の「その地域社会・社会サービス」は、さらに(1)レクリエーションおよび関連サービスと(2)宗教および他に分類されないサービスに分かれる。すなわち、上述した文化サービス関連の経費は、「その他の地域社会・社会サービス」の中に分類されている。

三 AUD III ファイルの編成

今回の分析の基礎としたデータは、AUD データファイルに格納されたオーケストラのコンサート、およびオ

ペラの公演における聴衆を対象に、われわれが関係団体の協力のもとに実施したアンケート調査の回答結果である。聴衆の社会・経済的特性の解明において、なぜこの種アンケート調査が不可避であるかについては、すでに本誌の八十二巻三号所収のわれわれの研究において述べておいたので、再びくり返さない。その研究においても言及したように、われわれのAUD データファイルは、NHK交響楽団の定期公演の聴衆に対して実施したアンケート調査（昭和五十二年六月）、東京フィルハーモニー交響楽団および東京交響楽団の定期演奏会の聴衆を対象に実施したアンケート調査（昭和五十三年、十、十一月）の結果を逐次入力することによってデータファイルの拡張を行って来たのであるが、今回は、さらに、昭和五十三年十一月に、二期会が行った二つのオペラ公演「モーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》とヤナーチェックの《利口な女孤の物語》」の聴衆に向けて行われたアンケート調査の結果が入力され、分析のデータとして利用された。すなわち、われわれのAUD データファイルは、さしあたり三つのサブ・ファイルによって構成されている。第一は、NHK交響楽団（以下N響と略す）の定

期公演の聴衆に関するサブ・ファイルであって、便宜上これをAUDIファイルと呼んでおくことにしよう。第二は、東京フィルハーモニー交響楽団（以下東フィルと略す）と東京交響楽団（以下東響と略す）の定期演奏会の聴衆に関するサブ・ファイルであって、以下AUDIIファイルと名付ける。第三は、二期会のオペラ公演の聴衆に関するサブ・ファイルであって、これをAUDIIIファイルと呼ぶ。

これら三つのサブ・ファイルの編成の基礎となる個々の聴衆に対する調査票は、AUDIファイルのそれを原型としているが、各サブファイルを編成する個々の目的が相違するのに従って、若干の項目の加除が行われている。本誌の八十二巻三号所収のわれわれの研究においては、AUDIIファイル編成のための聴衆に対するアンケート調査の調査票を例示のため再生しておいたので、小論では比較のため末尾にAUDIIIファイルを編成するための基礎となったアンケート調査の調査票を再生しておくことにしよう。ここで二つのアンケート調査票の質問項目のそれぞれについての比較に立入る余裕を持っていないが、AUDIIIファイルの場合においては、これまで

の主要な二期会のオペラ公演、外国のオペラ団体の公演を聴いたかどうか（質問項目十三）、何回聴いているか（質問項目十三）、入場料金に対する反応（質問項目十五）などオペラ固有の聴衆の実態を明らかにするための工夫がなされていることを注意しておこう。

前にも述べたように、AUDIIIファイルは、ほぼ時を同じくして持たれた二つの全く種類を相違するオペラの公演の聴衆に対するアンケート調査から編成されているところにも特色の一つがある。これら二つのオペラ公演において、調査は、モーツアルトの作品について四回の公演、ヤナーチェックの作品について三回の公演を選び、会場入口において調査票を配付し、終演後所定の場所に置かれた回収箱に投入する方法で回収を行った。⁽¹⁾ 回収回答数は一二四七、回収率は約二二%（小数点以下の四捨五入）であって、AUDIおよびAUDIIファイルと比較すると、回収率は若干落ちてゐる。この回収率の低下が、聴衆の側の要因に起因しているのか、それとも会場の施設・環境・雰囲気などの要因に影響されたものであるのかは、必ずしも明らかにしえない。われわれは、会場の施設―食堂・喫茶の完備・ロビーなど―が調査票の

記入を促す雰囲気には適合していなかったのではなかったかと言う予想を抱いているが、あくまで推測の域を出ていない。たしかに回収率の数字は、期待されたほど高いものではないが、八十二巻三号の論文で述べておいた判断と同じ根拠にもとづいて、AUD III ファイルに格納されたデータは、ほぼ解析に耐えられるものと考えることができよう。

いずれにしても、この種のアンケート調査は、政府が実施する統計調査のあるもののように、実査においては統計法上の強制力を伴い、また標本設計において無作為化を徹底することによって標本の選択が可能な場合と異って、回答者の自発的な協力のみに依存する性質のものである。また、未回答者に組織的な偏りが残っているかどうかをチェックするための再訪問調査、もしくは調査標本の入替えなどは、コンサートの持つ特殊性に由来するさまざまな制約——例えば、演奏の一回性など——のため実行することは、極端に難しい。従って、この種のアンケート調査の回収率の向上に対しては、さらにさまざまな工夫が要求されよう。

(11) 昭和五十三年十一月に持たれた二期会オペラの上演で

は、『ドン・ジョバンニ』は、五回、『利口な女狐の物語』は、三回の公演が、それぞれダブル・キャストの配役で上演された。われわれは、両上演の回数の標準化と、ダブル・キャストによる聴衆の選択の影響を解消させる目的で、本文に述べたように、調査対象の公演数と期日を決めたのである。

四 聴衆の年齢分布、所得分布、学歴分布

すでに本誌七十九巻一号、および八十三巻三号所収のわれわれの研究でも明らかにしたように、オーケストラのコンサートの聴衆の社会・経済的特性の重要なものの一つは、聴衆の性別および年齢別の構成である。そこで、まず最初に、オーケストラとオペラの聴衆における性別と年齢別の分布の状況を対照して見ることにしよう(第2表)。第2表は、オーケストラとオペラの聴衆の比較において、さまざまな興味ある事実をわれわれに教えてくれる。

まず第一に、合計(T)として見た三つのサブ・ファイルにおける聴衆の集りの年齢分布は、いずれも明瞭な双峰型の分布を共通に示し、高いピークが二十代に、低いピークが四十代に現れている。ただし、二十代および

第2表 聴衆の性別・年齢別分布

(単位: %)

	AUD I(NHK)			AUD II(TP・TK)			AUD III(NIKI)		
	T	M	F	T	M	F	T	M	F
—14	1.7	1.7	1.7(100.0)	2.0	2.1	1.6(100.0)	0.7	0.2	1.3(100.0)
15—19	7.7	7.4	8.1(100.0)	16.3	15.1	18.0(97.4)	8.8	2.7	14.9(100.0)
20—24	15.4	12.3	18.4(92.8)	30.2	26.8	34.9(97.8)	25.9	19.2	32.5(96.4)
25—29	20.1	20.1	20.1(66.1)	16.4	16.1	16.8(86.1)	17.1	20.2	14.1(86.6)
30—34	10.3	11.8	8.3(52.0)	10.0	12.1	7.3(63.8)	11.4	13.7	9.1(46.8)
35—39	9.9	9.6	10.3(34.0)	5.1	4.8	5.6(44.4)	7.6	7.4	7.8(31.0)
40—44	13.2	13.7	12.6(34.0)	6.8	7.1	6.4(29.3)	8.3	9.9	6.8(12.5)
45—49	10.4	10.7	10.0(29.1)	5.5	6.3	4.3(22.8)	10.2	13.5	7.0(5.3)
50—54	5.7	5.7	5.9(38.2)	3.8	4.4	3.0(21.1)	4.7	7.0	2.5(2.6)
55—	5.4	6.0	4.7(14.1)	3.8	5.1	2.2(14.3)	5.2	6.2	4.1(0.0)
計	100.0	100.0	100.0(60.0)	100.0	100.0	100.0(78.3)	100.0	100.0	100.0(60.8)
有効 データ 欠損 データ	3,686 915			1,531 130			1,175 72		

(注) T: 合計, M: 男子, FE: 女子。FE のカッコ内の数字は同一年齢階級内の未婚者比率を示す。

四十代のどの辺りでピークが出現するかについては、オペラの間での、またオペラの間における機能上の相違が反映されているようである。すなわち、N響の聴衆の場合(AUD I(NHK))、二十代のピークは、その後半(二十五—九歳)に現われるのに対し、東フィルと東響の場合(AUD II(TP・TK))、そのピークは、二十代の前半(二十一—二十四歳)に移っている。また、四十代のピークについて見ると、N響の聴衆の場合は、それが四十代の前半(四十一—四十四歳)に現われているのに対して、二期会オペラの聴衆の場合(AUD III(NIKI))は、そのピークは、四十代の後半(四十五—九歳)へとずれている。換言すれば、東フィルと東響の聴衆の場合、聴衆の主体は、学生を主体とする若年層にある(十五—二十四歳の聴衆の占める構成比が、四六・五%)のに対し、N響の聴衆を構成する主体は、若年(二十五—三十四歳の聴衆の占める構成比が、三〇・四%)と中年(四十代聴衆の占める構成比が、二三・六%)の給与所得者であることは、これらの分布の比較から直に観察されるところである。また、二期会オペラの聴衆において、中・高年の男子の聴衆(四十五—五

十四歳の男子聴衆の占める構成比が、二〇・五％）を比較的多く集めている事実が、それぞれの機能上の相違とこれに伴う聴衆の構成上の変化を表わすものであろう。しかし、いずれにしても、このように三十代の谷を持つ双峰型の年齢分布が、わが国のクラシック音楽演奏会の聴衆の社会・経済的特性を代表する重要な特徴を形成するものであることは、ほぼ疑いのない事実であろう。

第二に、男・女の合計として見た聴衆の年齢分布において、二期会オペラの聴衆のそれがN響と東フィルおよび東響のそれぞれの聴衆のほぼ中間に位置する恰好になっている事実も、注目してよい事実であろうと思われる。前にも述べたように、AUD III ファイルは、かなり性格を異にする二つのオペラの聴衆に対するアンケート調査から作られているから、それぞれに固有な聴衆の社会・経済的特性に注目しなければならない。事実、この点は、次節において、更に立入った検討を加えるつもりであるが、これらの考慮は別として、それらを全体として見た二期会オペラの聴衆の年齢分布に見られるこの中間的性格は、確かに注目に値する現象であると言ってよいであろう。

しかし、第三に、それにも拘らず、このオペラの聴衆

の性別・年齢別構成には、重要なもう一つの特徴が秘められている。それは、女子の聴衆において、三十代までの若年層の女子の全聴衆に占める比率が異常な高さ（六二・八％）を示す事実である。中でも、学生を主体とする若年層（十五—二十四歳の年齢階層）の占める比率は、四七・四％にまで達している。言い換えると、二期会オペラの女子の聴衆の約三分の二は三十代以下の若年の人びとで占められており、聴衆の約半数は学生であると言うことである。この現象は、AUD II ファイル、つまり東フィルと東響の聴衆の場合と酷似している。AUD II ファイルの場合においても、三十代以下の女子の聴衆の全女子の聴衆に占めるウエイトは、七〇・三％に達し、学生を主体とする若年層の占める構成比も、実に五二・九％にまで及んでいるからである。ただ、AUD II ファイルの場合では、男子についても類似の傾向が見られるのに対し、オペラの聴衆の場合には、学生を主体とする若年層の構成比において、男・女間には著しい相違が見られる。東フィルと東響の場合には学生に対する割引料金の導入などによって、若年層の聴衆の開拓を積極的に進めているのに対して、二期会オペラの場合には若年の

聴衆を優遇する特別の配慮はなされていない。とすると、オペラの女子の聴衆の場合、学生を主体とする聴衆が異常な高さを示す理由は、別に求められなければならないであろう。おそらくAUD III ファイルのミクロ的分析、とくにMDMによる解析は、この理由を説明するための恰好の応用例を提供するであろうが、その解析は小論に続く松田氏の論考に委ねるべきであろう。

第四に、女子のオペラの聴衆における未婚者比率の動きもオーケストラの聴衆、とくにN響のそれと著しい対照を形作っている。すなわち、中・高年の女子の聴衆(四十一―五十四歳の年齢階層)において、N響の聴衆の場合は、未婚者比率が一貫して高率であるのに対し、二期会オペラの場合は、未婚者比率が著しく低くなっている。比較的言って中・高年の女子の場合、オーケストラの聴衆には、かなりのウェイトで仕事を主とする有業者が含まれているのに対し、オペラの場合、主婦が圧倒的なウェイトを占めていると言つてよいであろう。

有業のオーケストラの聴衆の所得分布に関しては、すでに本誌の七十九巻一号および八十三巻三号に掲載の論文においてそれぞれ言及した。とくにAUD I ファイル

第3表 聴衆の5分位所得階級別分布 (単位: %)

所得分位 ファイル	I	II	III	IV	V
AUD I (NHK)	14.3	15.3	17.6	14.5	38.1
AUD II (TP・TK)	20.0	22.2	16.3	12.5	29.0
AUD III (NIKI)	14.6	16.2	18.2	13.1	37.7

(注) 5分位の階級刻みは、ファイル調査当該年の総理府統計局「家計調査年報」による。

である。オペラの聴衆の分布は、N響の聴衆のそれにほぼ一致している。最高の第V分位にほぼ四〇%の聴衆が集中しているからである。これに対して、AUD II ファイルを構成する東ファイルと東響の聴衆の場合には、分布が比較的に平均化している。このことは、これらのオーケストラの聴衆の分布が、比較的、若年に集中してい

を構成するN響の聴衆の場合、①男・女計について、所得分布が明瞭に高所得層に偏倚していること、②しかし、男・女間では分布の型に相違があり、比較的に言つて、男子は上層への偏りが強まり、女子では下層に重心が移っていることが観察されている。第3表は、三つのサブ・ファイルについて、男・女を合計した聴衆の5分位所得階級別の人員分布の状況を示したものである。オペラの聴衆のそれにほぼ一致している。最高の第V分位にほぼ四〇%の聴衆が集中しているからである。これに対して、AUD II ファイルを構成する東ファイルと東響の聴衆の場合には、分布が比較的に平均化している。このことは、これらのオーケストラの聴衆の分布が、比較的、若年に集中してい

(13) オーケストラの聴衆とオペラの聴衆

第4表 聴衆の学歴別分布 (単位: %)

教育段階 ファイル	中学	高校	短大	大学	大学院
AUD I (NHK)	2.6	15.6	10.8	61.1	9.9
AUD II (TP・TK)	2.2	19.4	15.3	57.3	5.8
AUD III (NIKI)	1.3	12.8	15.8	60.7	9.4

(注) 在学者を含む。

る事実と緊密に対応している。のみならず、最高分位の中に入るオペラの聴衆の中の七一・六%までが月収三〇万円以上を得ている人びとであることも、N響の聴衆の場合と非常に類似した結果を示している。この事実は、二期会オペラの聴衆の低いピークが、N響の聴衆のそれと比較して、より高年の方へとずれていることと関連しているように思われる。

われわれは、本誌の七十九巻一号および八十三巻三号所収の研究において、オーケストラの聴衆がきわめて高学歴を持つ人びとであり、N響の聴衆の場合であると、短大以上のいわゆる高等教育を受けた(ている)聴衆のウエイトは、男・女計で実に八二%に達していることを指摘しておいた。第4表は、三つのサブ・ファイルにおける聴衆の学歴別の分布を比較したものであ

る。結果は、男・女計で在学者を含めた数字である。オペラの聴衆の場合においても、高学歴化の傾向は明瞭である。前記の高等教育段階の聴衆は、N響の場合のそれを上回る八五・九%と言う高率を示している(ちなみに、東フィルと東響の聴衆の場合は、七八・四%)からである。なお、二期会オペラと東フィルおよび東響の聴衆の場合、短大の人びとの構成比がN響のそれをかなり上回るのは、前に注意した女子の聴衆の中で若年層の占めるウエイトの高いことと密接に相関していると思われる。英米の聴衆に関して同様の分析を行ったボウモルとボウエンの研究によると、オペラの聴衆は、オーケストラの聴衆と比較して、所得分布においてより低所得に集中する傾向があり、学歴も比較的、低学歴であることが指摘されているが、われわれの観察には、こうした傾向を支持する徴候は見出されない。

以上の観察を要約して、オペラを含めたわが国のクラシック音楽の演奏会における聴衆の最も注目すべき特徴は、年齢別の分布に見られる三十代聴衆の急激な落ち込みにあると言うことができると思われる。この聴衆の年齢分布における三十代の谷を引上げることが可能か。そ

第5表 趣味・娯楽に対する他の行動時間との相関係数

性別	行動パターン	家事・ 育児	買 物	通勤・ 通学	仕 事	勉強・ 研究
	M 0	0.00	0.05	-0.11	-0.36	-0.11
	FE 0	-0.08	0.00	-0.04	-0.26	0.01
	FE 1	-0.18	-0.06	-0.01	—	-0.01

(注) M 0: おもに仕事の男子, FE 0: おもに仕事の女子, EF 1: 家事の無業者の女子。

(出所) 総理府統計局, 「昭和 51 年社会生活基本調査報告, 全国 I, 行動時間編」, 昭和 53 年。

の目ぼしいところを収録したものである。仕事を主とする男子の有業者の場合、趣味・娯楽と仕事の間でマイナスの相関の程度が最も高く出ている事実は、男子の有業者にとって、仕事が趣味・娯楽の達成の最大の障碍とな

る手段はなにかと言った問題は、それ自体として検討に値するが、小論ではこれ以上立入る余裕を持たない。むしろ、ここではこの落ち込みの原因の推測をある程度まで裏付ける一つのデータを示しておこう(第5表)。

第5表は、『社会生活基本調査』の時間収支データから、十七の行動パターンを指定し、それらの相関係数を計算した中から、趣味・娯楽と他の行動パターンとの相関係数

っていることを示唆するものであろう。男子の聴衆における三十代の落ち込みの原因の一端は、こうした行動のパターンに帰せられるものと推測される。対応する女子の聴衆の三十代の落ち込みの原因として推測されるのは、育児・家事およびこれに関連する買物など家庭の営みである。第5表における家事の無業者の女子——通常の主婦(FE 1)——の数字は、この推測を裏付ける。すなわち、通常の主婦の場合、家事・育児と買物が趣味・娯楽の達成の妨げとなっていることが相関係数の比較によって推測されるからである。

五 二つのオペラの聴衆

前節では、主としてAUD III ファイルの分析に即しながら、オーケストラの聴衆とオペラの聴衆の比較を試みた。この比較から観察される事実は、二期会オペラの聴衆の場合、女子の聴衆の中で、(i)若年層の占める比率が著しく高くなっている。(ii)中・高年層の未婚者比率がかなりの程度低いと言う事実を別にするならば、年齢分布、所得分布および学歴分布において、N響の聴衆に類似した分布が示されるということである。とするならば、年

(15) オーケストラの聴衆とオペラの聴衆

年齢、所得、学歴と言った主要な社会・経済的屬性と聴衆が過去一年間に演奏会に通った頻度とを多重に組み合わせることによって、われわれが本誌の七十九巻一号および八十三巻三号で行ったのと同様の分析をオペラの聴衆に対して適用することが期待されるであろう。もとよりそれは興味ある研究の題目である。しかし、それを行うに先立って、ここではもう少しオペラの聴衆に固有な属性の分析を試みてみたい。本論文の末尾に附録した調査票の質問項目の十三として、過去四年間に訪日した外国のオペラ団体の公演を聴いた経験の有無とその演目が問われている。これらの外国のオペラ団体とは、一九七四年に來日したバイエルン州立オペラ(BSO)、一九七五年のメトロポリタンオペラ(MO)、一九七六年のイタリア・オペラ(LI)、一九七七年のベルリン国立オペラ(BSK)および同年のモスクワ・オペラ(MOSC)である。第6表は、それぞれのオペラ公演に少くとも一回は行った人びとの数と3回以上同一のオペラ団体の公演に通った人びとの数とを対比したものである。第6表の(4)行は、これら外来オペラ団体の公演に少くとも一回は行ったことのあるAUD IIIファイルの聴衆の

第6表 外来オペラに対する聴衆の反応

	1974 BSO	1975 MO	1976 LI	1977 BSK	1977 MOSCO
(1) 人びとの数	300	244	409	382	172
(2) 3回以上行った人びとの数	73	41	87	80	24
(3) (2)÷(1)	0.243	0.166	0.213	0.209	0.140
(4) (1)÷1247	0.241	0.196	0.328	0.307	0.138

(出所) AUD III ファイル

全数に対する比を計算したものであって、これによると、外来オペラによって多少のバラツキはあるとは言うものの、二期会オペラの聴衆の二〇—三〇%の人びとが、少くとも一回はこれらのオペラ公演を聞いていると言う結果がえられる。また、この比率のバラツキは、ある程度までわが国のオペラ愛好家の好みを反映していると言える。特に注目されるのは、(3)行の結果である。(3)行は、これらの外来のオペラ公演に少くとも一回は行ったことのある人びとの数で、同一の公演に三回以上行った人びとの数を割った値を示している。同一の団体の公演に三回以上通うと言

うのは、極めて熱烈なオペラ愛好家と考えざるをえないが、こうした熱烈な愛好家が、少くとも一回は行ったことのある人びとの中の一五―二五%を占めていると言うこともオペラに対する潜在的な需要が決して少なくないと言ふことの一つの数字的な例証と言つてよいであろう。

(3) 行の数値の中で最高のスコアを記録したのは、バイエルン州立オペラの公演であるが、この結果は、同オペラの公演が極めて玄人受けするものであったことを証拠立てていると考えられよう。

このほかにも、質問項目の十五に見られるように、いわゆる第二国立劇場の実現を想定して、その場合の聴衆の年間のオペラ公演を見たいと希望する回数と、その場合の入場料の関係を日本のオペラ団体と外来のそれと対比させて問うた質問の集計結果などは、前述のオペラの潜在需要に関連する「主観的な需要関数」の分析の観点からすこぶる興味のあるものであるが、すでに紙幅もつきており、これ以上立入って検討する余裕を持っていない。最後に、AUD III ファイルを構成する二つのオペラ公演に通った聴衆の社会・経済的特性の異同について、少しふれておくことにしよう。

第7表 オペラの演目別の聴衆の年齢分布

(単位: %)

演 目 年齢階級	全 数	ドン・ジョバンニ	利口な女狐の物語
—14	0.7	1.2	0.2
15—19	8.8	10.1	7.6
20—24	25.9	23.9	27.4
25—29	17.1	17.1	16.6
30—34	11.4	9.9	12.9
35—39	7.6	8.0	7.1
40—44	8.3	8.6	8.3
45—49	10.2	11.1	9.4
50—54	4.7	4.4	5.5
55—	5.2	5.7	5.0
有効データ数	1230	665	565
欠損値データ数	17	14	3

(出所) AUD III ファイル

(注) 有効データと欠損値データは年齢分布に関する数値

第7表は、AUD III ファイルをさらに演目別に細分して、モーツァルトの『ドン・ジョバンニ』と、ヤナーチェクの『利口な女狐の物語』のそれぞれに通った聴衆について(男・女計の)年齢分布を示したものである。明らかにこれら二つの演目の聴衆の年齢構成の間には相違がある。『利口な女狐の物語』における若年層(二十一―三十五歳階層)の占めるウェイトは、五六・九%であつて、

(17) オーケストラの聴衆とオペラの聴衆

第8表 オペラの演目別聴衆の5分位所得階級別分布 (単位: %)

所得分位 演 目	I	II	III	IV	V
全 数	14.6	16.2	18.2	13.1	37.7
ドン・ジョバンニ	14.6	14.9	16.9	14.6	39.0
利口な女狐の物語	17.0	17.3	19.4	11.1	35.2

(出所) AUD III ファイル

《ドン・ジョバンニ》のその五〇・九%をかなり上回っている。しかしながら、《ドン・ジョバンニ》において中・高年層(四十歳以上の年齢階層)が二九・八%のウエイトを占めるのに対し、《利口な女狐の物語》の場合においても二八・二%であって、両者の間には著しい相違は見られない。つまり、二つの演目における聴衆の年齢分布における相違は、一つには若年層のウエイトの相違

によって、もう一つは、四十五―四十九歳の階層のピークの盛り上りの程度によって説明されるものと言うことができる。《ドン・ジョバンニ》における四十五―四十九歳階層は、全数の場合と比較しても、一層急激な構成比の上昇を示しているからである。

この相違は、第8表

に示したオペラの演目別の聴衆に関する5分位所得階級別の分布を対比することによって一層明瞭になる。すなわち、《ドン・ジョバンニ》における聴衆の場合、高所得分位への聴衆の偏倚の程度が歴然と観察されるのに対し、《利口な女狐の物語》の聴衆の所得分布は、むしろ平均化の傾向を示している。言い換えると、《ドン・ジョバンニ》における聴衆層の所得分布のパターンは、第3表で示したN響の聴衆のそれに一層の近似を見せるのに対して、《利口な女狐の物語》の聴衆の所得分布は、むしろ同じ第3表の東フィルと東響の聴衆の分布パターンに近づくと言つてよいであろう。

われわれは、年齢分布と所得分布の二つの側面から二つのオペラの演目における聴衆の相違を指摘したのであるが、そのことは、必ずしもこれら二つの演目に関する聴衆の集りが互に素であることを意味するものではない。事情はむしろ逆であつて、二つの演目の聴衆の集りの間には共通部分が存在している。この共通部分が、どのような社会・経済的属性によって支配されている存在であるかは、関連する他の質問項目、例えば、これまでの二期会オペラ公演を聴いた経験の有無、他の音楽会へ行つ

たことの経験など、と結びつけることによって、その立体的な全容を明らかにしうるものであろう。それは、 DM を核とする数理分類理論に期待される新しい展開の

フロンティアである。その考察の一斑については、小論に続く松田氏の研究を参照されることを期待しておく。

(一橋大学教授)

(附図) AUDⅢファイル編成用調査の調査票

オペラとオペラ・ハウスを
われわれの手に！

だい2こくりつげきじょう・第二国立劇場

1. あなたの性別・年齢などは、どれに該当しますか。

- | | | |
|--|---------------------------------------|---------------------------------------|
| { 11 男 ☐ { 21 未婚 ☐
{ 12 女 ☐ { 22 既婚 ☐ | 30 14 歳以下 ☐ | 35 35 - 39 歳 ☐ |
| | 31 15 - 19 歳 ☐ | 36 40 - 44 歳 ☐ |
| | 32 20 - 24 歳 ☐ | 37 45 - 49 歳 ☐ |
| | 33 25 - 29 歳 ☐ | 38 50 - 54 歳 ☐ |
| | 34 30 - 34 歳 ☐ | 39 55 歳以上 ☐ |

2. あなたの最終学歴は（在学学生は、現在の）どれに該当しますか。

- 1 中学 ☐ 2 高校 ☐ 3 短大(職業専門校) ☐ 4 大学 ☐ 5 大学院 ☐
(旧制中学) (旧制専門学校等)

3. あなたの職業はどれに該当しますか。

- | | | | |
|---------------|--------|------------|------------|
| 11 専門・技術職 | 21 芸術 | 31 農林・漁業 | 41 開業医 |
| 12 事務職 | 22 医療 | 32 商工・サービス | 42 音楽家 |
| 13 管理職 | 23 教育 | 33 自由業 | 43 小説家・評論家 |
| 14 販売・サービス | 24 その他 | 44 主婦 | 44 画家 |
| 15 運輸・通信・保安 | | 45 学生 | 45 弁護士 |
| 16 技術・生産工・作業職 | | 46 無職 | 50 その他 |

4. あなたの税込み月額収入は(主婦・学生・無職の方は必要ありません)

1. 12万円以下 2. 12～14万円 3. 15～19万円 4. 20～24万円 5. 25～29万円 6. 30～40万円 7. 40万円以上

5. 現在、ご自分で音楽活動をしていらっしゃいますか。

- 11 は ☐ それはどんな種類。どのような回数ですか。
- 12 大きい ☐
- | | |
|--|--------------------------------------|
| 21 音楽専門家 ☐ | 31 毎日 ☐ |
| 22 音楽学生 ☐ | 32 週に2〜3回 ☐ |
| 23 アマチュア・オーケストラ ☐ | 33 月に2〜3回 ☐ |
| 24 アマチュア・コーラス ☐ | 34 3ヶ月に2〜3回 ☐ |
| 25 数人のグループで ☐ | 35 たまに ☐ |
| 26 個人(家版)の楽譜 ☐ | |

6. この公園をなにでお知りになりましたか。

- | | | | |
|--------------|--------------------------|---------------|--------------------------|
| 1 「二期会通信」 | ☐ | 5 公演プログラムの予告 | ☐ |
| 2 新聞の記事・広告 | ☐ | 6 駅貼りポスター | ☐ |
| 3 音楽雑誌の記事・広告 | ☐ | 7 ほかの演奏会でのちらし | ☐ |
| 4 二期会関係者 | ☐ | 8 その他 | ☐ |

7. あなたは二期会オペラ愛好会員ですか。会員の種別はどれですか。

- 11 はい ☐ → 21 維持会員 ☐ → 会員になって → 31 1年以内 ☐
 12 もいいえ ☐ 22 特別会員 ☐ 32 2～4年 ☐
 23 新入会員 ☐ 33 5年以上 ☐

8. 今日の公演の切符はお買求められましたか。

- 10 はい ☐ → 入場券の値段は適当ですか → (11 高い ☐ 12 普通 ☐ 13 安い ☐)
20 ともは ☐ → (21 二期会招待 ☐ 22 友人、家族から ☐ 23 その他 ☐)

0. 全世帯のうち、電化製品が不足しているのはどの地域ですか？

9. 会場からお家に帰られるのにどれ位時間がかかりますか。
- | | | | |
|------------|--------------------------|-----------|--------------------------|
| 1 30分以内 | ☐ | 3 1時間～2時間 | ☐ |
| 2 30分から1時間 | ☐ | 4 2時間以上 | ☐ |

16. ご協力ありがとうございます。その他のご意見・ご希望をご記入下さい。

10. あなたの席はどこですか、オペラを見て聴くには良い場所ですか。

- U. のあたりの席はとてすが、スクリーンを見て聴くには良い場所ですか。
- 見るに
- | | | |
|---------|---------|---------------------------|
| (21) 最通 | 聞くに | (31) 最通 |
| (22) 普通 | (32) 普通 | (11) 1階 |
| (23) 悪い | (33) 悪い | (12) グランド・サークル
中2階(GC) |
| | | (13) 2階 |
- 座席 →
- | | | |
|-----|-----|---|
| [] | [] | 列 |
| [] | [] | |
- 他の席を希望しましたが
- | | | |
|------|--------|-------------|
| {はい | 41 [] | 51 もっと高い切符を |
| {いいえ | 42 [] | 52 同じ値段の切符で |

11. 今年の二期会のオペラ公演にこられたことがありますか。また、行く予定がありますか。今日の公演の感想と一緒に答え下さい。

いった　よかった　ふつう　よくなかった
 (いく予定) (期待してる)　　(期待しない)

- | | | | | | | | | |
|-----------------|----|--------------------------|----|--------------------------|----|--------------------------|----|--------------------------|
| 1月公演 ファウスト | 10 | ☐ | 11 | ☐ | 12 | ☐ | 13 | ☐ |
| 2月公演 デイドとエネアス | 20 | ☐ | 21 | ☐ | 22 | ☐ | 23 | ☐ |
| 5月公演 ちゃんちき | 30 | ☐ | 31 | ☐ | 32 | ☐ | 33 | ☐ |
| 11月公演 ドン・ジョヴァンニ | 40 | ☐ | 41 | ☐ | 42 | ☐ | 43 | ☐ |
| 11月公演 利口な女狐の物語 | 50 | ☐ | 51 | ☐ | 52 | ☐ | 53 | ☐ |
| 明春 ウィンザーの微笑な女たち | 60 | ☐ | 61 | ☐ | 62 | ☐ | 63 | ☐ |

12. 過去1年間に、このオペラ以外の音楽会へ行きましたか。

- | | 日本 | 外来 |
|---------|----|----|
| 1週に1~2回 | 31 | 41 |
| 2週に1~2回 | 32 | 42 |
| 3週に1~2回 | 33 | 43 |
| 4週に1~2回 | 34 | 44 |
| 半年に1~2回 | 35 | 45 |
| 年に1回 | 36 | 46 |

13. 次の過去4年のオペラ公演で見に行ったのがありますか。どんな演目でしたか。

- | | | | | | | |
|-------|--------------|----|------|----|----|------|
| 1974年 | 『エンペーン』国立オペラ | 10 | (11) | 12 | 33 | 他() |
| 1975年 | メトロポリタンオペラ | 20 | (21) | 22 | 23 | 他() |
| 1976年 | イタリア・オペラ | 30 | (31) | 32 | 33 | 他() |
| 1977年 | ベルリン国立オペラ | 40 | (41) | 42 | 43 | 他() |
| 1977年 | モスクワ・オペラ | 50 | (51) | 52 | 53 | 他() |
| | 制作オペラ | 60 | (61) | 62 | 63 | 他() |

14. もし第2国立劇場が実現したら、どのようなものの公演を希望しますか。
(2つ以上に✓印をつけてもかまいません。)

- | | | | | | |
|----|---------------|--------------------------|----------------------------|----|--|
| 11 | オペラ | ☐ | 上
演
希
望
作
品 | 21 | |
| 12 | オペラコミック・オペレッタ | ☐ | | 22 | |
| 13 | ミュージカル | ☐ | | 23 | |
| 14 | バレエ | ☐ | | 24 | |

15. もし第2国立劇場が実現したとき、1年間に何回ぐらいどのような植
 段のものをききますか。外資公園ならどの植段ですか。

- | | | 3千円以下 | | 3～4千円 | | 4～6千円 | | 6千～1万円 | | 1万円以上 | |
|----|---------|-------|--------------------------|-------|--------------------------|-------|--------------------------|--------|--------------------------|-------|--------------------------|
| | | 日本 | 外国 | 日本 | 外国 | 日本 | 外国 | 日本 | 外国 | 日本 | 外国 |
| 10 | 月に1～2回 | 11 | ☐ | 12 | ☐ | 13 | ☐ | 14 | ☐ | 15 | ☐ |
| 20 | 3月に1～2回 | 26 | ☐ | 28 | ☐ | 29 | ☐ | 30 | ☐ | 31 | ☐ |
| 30 | 半年に1～2回 | 31 | ☐ | 32 | ☐ | 33 | ☐ | 34 | ☐ | 35 | ☐ |
| 40 | 年に1回 | 41 | ☐ | 42 | ☐ | 43 | ☐ | 44 | ☐ | 45 | ☐ |

16. ご協力ありがとうございます。その他のご意見・ご希望をご記入下さい。